

書評 BOOK REVIEW

富樫公一〔著〕

分断の中の治療者

——当事者性と倫理的転回

A5判上製・岩崎学術出版社

2025年10月刊

定価3,960円（税込）

評者＝中村曜子（池袋精神分析的心理療法オフィス）



世界では戦争が行われ、ホルムズ海峡の問題が連日取りざたされるなかで、「分断」や「当事者」ということばを耳にする機会が増えています。私は、自分には関係ないと思うことで、不安から身を守っていました。分断や当事者性について何度も語ってきた富樫先生にあえて近づかないようにしていたのも、同じ理由からでした。だからこそ『分断の中の治療者』の書評を依頼されたとき、目を逸らすことはできないのかと苦笑いをしてしまいました。ところが読み始めた途端、私は一気に引き込まれていきました。

それは、本書の特徴である、一貫した書き方によるものです。「～か」という問いかけが文末に繰り返されています。日頃私たちは多くの本を読み、理論であったり、症例報告であったりと、著者の考え方を学ぶ機会になっています。これは読書であり傍観者でよいのです。ところが本書はそうはいきません。その問いが重ねられることで、まるで隣で問いかけられているかのような感覚になります。そしてその問いに向き合うために歩みを止め、自問せざるを得なくなるのです。「読者」として他人事ではいられなくなるのが本書です。

「はじめに」のなかに「心の揺らぎ」「心の奥の揺れ動き」ということばが出てきます。治療者は逆転移に敏感でなければならないと言われていることもあり、私は自分のなかにどのような感覚や感情が動いたかに開かれているつもりでした。ところが、本書で何度も「～か」と問い続けられているうちに、「つもり」だったのではないかと心が揺れはじめました。本書は、社会の分断だけではなく、読者自身の内なる分断にも目を向けさせます。そして私は気づきました。私が恐れていたのは、自分の「分断」に手を付けることだっ

たのだと。たとえば、苦痛にまみれた人生を送ってきた患者とすると、そこまでの人生にさせた相手に対して強い憤りを感じます。しかし、これは富樫の言うように、「隣人」は私であったかもしれない、という当事者性への自覚がないからこそその憤りです。自分のことではない、という分断が起きていたことに、気づきなくなかったのです。しかし本書は、「分断」の逃げ道を塞ぎます。富樫の問いかけは、私を観客席に留めておいてはくれません。自分の弱さを、そして隣人が自分であったかもしれないことをわかろうとしなかった自分を、恥ずかしいものとして隠蔽するのではなく、言語化し続けること。それが自分に課されたことだと、この本に拘束されたことで気づかされます。

本書は、私をはじめ多くの臨床家たちの心を揺さぶります。そして私たちは、臨床家である以上、本書で語られる「どうしても目を離せなくなったあの感覚」から逃げることはできません。本を閉じた後も、富樫からの問いは消えないでしょう。「これで本当にいいのだろうか」。